ギアニャール(バリ島・インドネシア)の都市空間構成に関する研究

—東南アジアにおけるヒンドゥー都市の比較研究—

THE URBAN FORMATION OF GIANYAR IN BALI ISLAND, INDONESIA

—Comparative study on Hindu principle of urban formation in Southeast Asia—

山本直彦*, 布野修司**, 平尾和洋***, 川畑良彦****

Naohiko YAMAMOTO, Shuji FUNO, Kazuhiro HIRAO
and Yoshihiko KAWABATA

This paper analyses the influence of Balinese Hindu principle on the urban formation of Gianyar, one of the traditional towns founded in 18th century in Bali Island. Even though Balinese towns and villages have common house compounds as a fundamental unit, the structure of the settlements make several significant differences between towns and villages. In contrast with the linear composition of villages, urban structure of Gianyar rather has its focus in the center of the town. The analysis on caste distribution also illustrates the importance of the center. The emergence of urban blocks in Gianyar brought about several plot division patterns as opposed to the simple back-to-back plot division in the villages. However the analysis has revealed that the variety of plot division patterns in Gianyar is regulated by the sole principle i.e. the avoidance of building the gate for each house compound toward the north direction. The well-known Balinese cosmological concept of *Nawasanga* not only influences the planning of the house compound but also the urban formation.

Keywords : Gianyar, Bali, Hinduism, Urban structure, Southeast Asia, Indonesia

ギアニャール、バリ、ヒンドゥー教、都市構造、東南アジア、インドネシア

1. はじめに

1-1 研究の背景と目的

筆者らは、これまでにインドネシア・バリ島のヒンドゥー藩王国のひとつであったカラングサムKarangasamの植民都市として、隣接するロンボク島に18世紀に建設されたチャクラヌガラCakranegaraについて研究を行ってきた。チャクラヌガラは、整然としたグリッドパターンによって街区が構成されている(図1)¹⁾。計画都市として建設されたバリ・ヒンドゥーの理想都市と考えられる。本研究の直接の動機は、いわば宗主国であるバリ島の都市形態の構成原理が、チャクラヌガラの都市構成により純粋に現れているのではないかと、いう仮説から出発している。

また、インドネシアの歴代ヒンドゥー王国²⁾の本拠地であったジャワ島は、14世紀にイスラーム化の波に襲われる。イスラーム王国の覇権の確立とともにジャワ島最後にして最大のヒンドゥー王国であったマジャパヒトMajapahit³⁾からは、多くのヒンドゥー教徒がバリ島へ逃れた(図2)。かつてのマジャパヒトの王都トロウランTrowulanは、廃墟と化し、現在、発掘作業が進みつつあるが依然としてその全貌は明らかではない。バリ島の藩王は、その正統性をマジャパヒトからの系譜に依拠するのが一般的であることを考えれば、バリ島の都市形態は、ジャワ島における初期ヒンドゥー都市の構成

について示唆を与えるものとも位置づけられる。

チャクラヌガラでは、マジャパヒト王国の宮廷叙事詩「ナーガラクルターガマNagarakertagama」の写本が発見されている⁴⁾。トロウランの王宮の叙述を含んだこの写本は、バリ島で数世紀の間保持され続け、そしてロンボクまで伝えられているのである。14世紀から18世紀にかけて、ジャワ島からバリ島へ、そしてロンボク島へとそ

図1 ロンボク島チャクラヌガラ中心部の都市構成

* 立命館大学理工学部建築都市デザイン学科
講師・博士(工学)
** 京都大学大学院工学研究科建築学専攻 助教授・工博
*** 立命館大学理工学部建築都市デザイン学科
助教授・博士(工学)
**** 松下電工 工修

Lecturer, Dept. of Architecture and Urban Design, Ritsumeikan Univ., Dr. Eng.

Assoc. Prof., Dept. of Architecture and Architectural Engineering, Graduate School of Engineering, Kyoto Univ., Dr. Eng.

Assoc. Prof., Dept. of Architecture and Urban Design, Ritsumeikan Univ., Dr. Eng.

Matsushita Electric Works, Ltd., M. Eng.

の支配版図を移動、拡大したインドネシアのヒンドゥー王権の都市を考える場合に、バリ島は、地理的にも歴史的にも、その結節点と考えられる。

他方、バリ島に関する既往研究については、「(20世紀の初頭のバリ島の各藩王領の首都は、)なかばヨーロッパ的、なかば中国的な商業都市となっている。しかし、バリのほんとうの暮らしは何千もの村や集落の中につままっているのだ。」とコバルピアスが述べるように⁵、その興味のひとつが、人類学を始めとした様々な領域において村落研究に集中している。後述するように建築学の分野からの既往研究も、伝統的住居や村落構成に焦点をあてるものが大部分で、都市研究は管見によればわずかに過ぎない。この意味で、本稿は、バリ島の居住文化という枠組みに限っても、これまで扱われてこなかった都市研究に焦点を当てるといえる意義を持っている。

バリ島の伝統的住居は、山⇄海(カジャkaja⇄クロックelod)という相対方位と日の出⇄日の入り(カンギンkangin⇄カウーkawuh)という絶対方位の空間ヒエラルキーが重層した3×3のマングラ状の構成をとるナワサंगाNawasangaと呼ばれる空間概念の上に成立していることはよく知られる。

本稿の目的は、以上を背景として、バリ島の村落と都市の構成の違いを見る視点を、事例研究を通して提示した上で、こうしたバリ島の独自の空間概念が、その都市構成にどのように影響しているのか明らかにすることである。さらに上述のように、チャクラヌガラ⁶の都市構成を理解する上での示唆を得ることも視野に入れている。

バリ島は現在8県(カブパテンKabupaten)に分かれている。この区分はかつての藩王国の支配版図を継承したものであり、それぞれの県庁所在地が、かつての藩王国の支配中心であった王宮都市である。バリ島の中心的王権は、南部を中心として歴史的に展開してきた。この地域には、デンパサールDenpasar、タバナンTabanan、ギアニャール、クルンクンKlungkun、バンリBangliの5つの都市が存在する。一方、ヌガラNegara、シンガラジャSingaraja、カラングセムは地理的に、この中心的位置から離れている。これら3つの都市は沿岸に位置し交易都市としての性格が強く、トロウランやチャクラヌガラがそうであるように、通常、王宮都市は内陸部に位置する特徴から外れている(図3)。バリ島南部の5つの都市のうちから、ギアニャールを選定した理由は、ギアニャールがその市域北側に、王家の本貫村落バンBengを持っているためである。

ギアニャールとその本貫村落を始めとした周辺集落における現地調査は、2003年7月16日～9月27日の間に行った。主な調査内容は以下のとおりである⁸。

- ・宅地割り、街路・路地、屋敷地出入り口向きの現状調査
- ・寺院、王宮、集会施設等の施設分布調査
- ・カーストの住み分け分布調査

図2 インドネシアのヒンドゥー王国の支配版図の移動と拡大

表1 ギアニャールとデサ・バンで行った聞き取り調査の内容とインフォーマント

聞き取り内容	インフォーマント名(屋敷地の場所)	記述位置
①藩王国の伝統的行政体制	Anak Agung Saren kawuh氏(プリ・バン)	2-1節
②アビアンバセの街路構成	Anak Agung Ode Raka Payadnya氏(プリ・ア・ンハセ)	2-2節
③デサ・バンの旧王宮跡地	Ida Pendeta Ode Agung Putra氏(グリ・ア・アグン)	3-2節
④アルン・アルンの変化	I. Wayan Sukja氏(サン・ア・ン)	脚註26
⑤屋敷地の北門忌避	I. Dewa Made Suta氏(スゴン・カンギン)	4-3-1項
	I. Made Sliarsa氏(クロック・カウー)	4-3-1項

- ・バンジャールbanjar⁷と呼ばれるコミュニティ単位の境界調査
- ・ギアニャールの4地区における屋敷地内の住棟構成の実測調査
- ・表1に挙げた内容の聞き取り調査⁸

1-2 既往の研究

バリ島に関して人類学からの研究は、「劇場国家ヌガラ」の概念を提出したGeertz (1980)を筆頭に、近年ではバリ・ヒンドゥーの総本山であるブサキBesakihの寺院群とその祭祀圏について綿密な考察を行ったStuart-Fox (2002)など枚挙に暇がない。

建築・都市計画学からは、古バリ人の村落プランを復元したTan (1966)、伝統建築の保存問題を扱ったBudihardjo (1986)、伝統建築における門の象徴性を考察したSaraswati (2002)、村落構成をモデル化して示したGelebet (1978)、また本邦からはParimin (1986)と鳴海 (1993)による広範な村落構成の共同調査研究、軸線上に配置される村落構成に着目した大谷 (2000)、古バリ人の村落について報告した佐藤 (1992)などがあるが、すべて村落あるいは伝統住居に関するものである。

都市に関するものは、Nas (1995)による都市の交差点などに設置される彫像の持つシンボリズムについての考察、Samadhi (2001)によるバリの文化を踏まえた都市開発コンセプトの提案がある。また、上述のStuart-Foxは、13分野を網羅したバリに関する文献リストを著している。そのひとつの分野Social Sciencesの細分類Urban areasに、都市研究の文献が記されているが、ほとんどが都市開発整備の計画・報告書であり、都市構成を分析した学術的な研究は見られないのが現状である⁹。

1-3 ギアニャールとデサ・バンの歴史的関係と比較の視点

ギアニャールの年代記によれば、その王家は初代王デワ・マンガス・クニンDewa Manggis Kuningが本貫村落バン(以下、「デサ・バン」¹⁰)に住み着いた。その後、二代目の王であるデワ・マンガス・パハンPahangが、アビアンバセAbianbase、スロンゴSeronggo、ビトラBitaraといった現在のギアニャール周辺の村落を興し、さらに四代目の王であるデワ・マンガス・アピApiが、1771年にこれらの村落の中心に、その結節点としてギアニャールを興した(図4)。ギアニャールは、グリアgria(家)+アニャールanyar(新しい)というバリ語をその名前の語源としている¹¹。王族が住む新たな家を建設して興した町ということである。

図3 バリ島の藩王国の支配版図と藩王国の王宮都市の位置

バリ島においては、伝統的住居や屋敷地は、村落と都市で基本的に共通している¹²。このように集落¹³を構成する基本単位が共通している場合、村落構成と都市構成の違いを見るには、路地、街路、宅地といった都市組織の集合のしかたの違いが問題となる。この点において、デサ・バンとギアニャールは、格好の比較考察を行う対象となるのである。以下では、両者を比較しながら考察を行う。また現在、ギアニャールとその南のアビアンバセは連続したビルトアップエリアなので、この両者は一体として扱う。

2. 集落の基本構成と王宮

2-1 王族階級の位とその伝統的行政版図

ギアニャール藩王国の伝統的な行政体制は、後述する貴族階級のうち、特に王族によって担われてきた。その統治体系は、ラジャ raja (王) を頂点として、以下、位の高い順にパティ patih (大臣) - プンガワ pengawa (県知事) - マンチャ manca (村長) の四段階からなる。それぞれが位に応じた集落を世襲的に治めてきており、現在もその子孫が各集落において、プリ puri と呼ばれる王宮に居住し続けている。ラジャとパティは協同して、藩王国全体を治めた。その下のプンガワは、デサ・アビアンバセを治めてきた。デサ・バン、デサ・スロンゴ、デサ・ビトラは、さらに村落のランクも一段階下がり、マンチャが治めてきた¹⁴。

2-2 中心街路と王宮の位置

バリ島の村落は、山⇄海の軸に沿った道に直線状に形成されるのが基本だが、村落が拡大すると、この軸と直行する道を持つようになり、村落は四辻を中心に形成されるようになる。鳴海(1993)は、この変化を都市的な村落への移行状態とする¹⁵。デサ・バンも同様に山⇄海の軸と直行する(東西方向の)道を持ち、複数の四辻を持つ。

図4 デサ・バンとギアニャールおよび周辺村落の関係、
プンバタンとプリの位置

この四辻をバリ語では、プンバタン Pempatan と呼ぶ¹⁶。ギアニャールは、その中心部に主要な四辻を都市の骨格として持つ。この四辻は、プンバタン・アグン Agung (「高貴な四辻」の意味) と呼ばれる。周辺には、王宮、アルン・アルン Alun-alun と呼ばれる広場等が位置し都市の中心をかたちづけている。デサ・バンの王宮、プリ・バンは、プンバタンの北東角の敷地に位置している。同様にギアニャールのプリ・アグンもプンバタン・アグンの北東角に位置する。これは、ギアニャールにおいてナワサンガで最も神聖な区画である北東角の方角に一致する。また、ギアニャールから、バリ島の聖山でヒンドゥー教の世界中心山のメール山(須弥山)にあたるグヌン・アグン Gunung Agung を望む方角でもある。アビアンバセの王宮であるプリ・アビアンバセは、南北道路に東西道路が西から交差する三差路の突き当たり位置する。聞き取りによれば、形態的には三差路であるが、人々はこの三差路を習慣的にプンバタンと呼んでいるという。プリ・アビアンバセも三差路から見ると、北東側にその中心がある¹⁷。つまり、概念的には、プリが四辻の北東角に建つことは、人々によって共有されていると考えてよい。さらにギアニャールでは、プリ・アグンから北側に、ジュロ・スングアン Jero Sengguan と呼ばれる王族の末裔の屋敷地があるが、これもプンバタンの北東角にある¹⁸。

以上のように、集落の中心骨格にプンバタンを持ち、その東北角にプリあるいはジュロがあることは、全ての集落に共通の特徴である。

3. カーストの住み分け

3-1 バリ島におけるカースト

バリ島には、インドと同様の身分制度があり、カスタ kasta と呼ばれる。インドにおけるヴァルナ制度は、身分の高い順にブラーマン(僧侶階級)、クシャトリヤ(貴族階級)、ヴァイシヤ(商人階級)、シュードラ(奴隷階級)の四階級からなるが、バリ島のカスタもほぼ同様の身分階級名で呼ばれる。上からブラーフマナ brahmana、サトリア satria、ウェシア wesia、スードラ sudra (あるいはジャバ jaba¹⁹)の四階級である。ただしスードラという呼称は通常避けられ、その代わりにバリ・ピアサ Bali biasa (「一般バリ人」の意味) が用いられる。ブラーフマナ、サトリア、ウェシアの3カーストは、上位カーストとしてまとめられトリワンサ Triwangsa と呼ばれる。これも上位3ヴァルナがインドでも再生族と呼ばれるのに対応する。また、バリ島に特有の身分階層として、パンデ Pande と呼ばれる階層がある。これは特にその職能と結びついた階層であり、世襲的に鍛冶屋を生業とし、クリス keris と呼ばれる正装時に佩用される短剣を鍛造してきた人々である。

尚、カーストの住み分け分布調査は、バリ島に特有のカーストに応じた命名方法を頼りに、居住者の名前からカーストの特定を行った。デサ・バンとギアニャールについては、直接に居住者から名前の聞き取りを行ったが、アビアンバセについては、基本的に屋敷地に表札が掲げられており、これをもとにカーストの特定を行った。

3-2 デサ・バンにおけるカーストの住み分け

図5(上側)にデサ・バンにおけるカーストの住み分けを屋敷地ごとに示し、同時に街区を基本として、便宜的に東西方向最大4区画、南北方向最大5区画に分割して番号をふり、その区画ごとに各

図5 デサ・パン、ギアニヤール、アビアンバセにおけるカーストの住み分けと分布割合

カーストの占める割合を示した。

デサ・パンは地形的には南から北に向けて(図5で下から上へ)高くなっていく土地にある。基本的にトリワンサと呼ばれる上位3カーストが、地形的にはより高い北半分(N-4, N-3, N-2行)に集中し、バリ・ピアサが南半分(N-1, S-1行)に集中している²⁰。また、パンデの屋敷地は、ブリの西側と村落の北半分に住んでいることから、その階級はトリワンサに準じるものであることが分かる。

トリワンサのうち最も身分が高いブラーフマナの屋敷地は、村落の北端に集中している。ブラーフマナの屋敷地は、一般にグリアと呼ばれる。中でもブダングダ pedanda と呼ばれるヒンドゥー教の最高司祭が居住する格式の高い家系の住む屋敷地は、グリア・アグンと呼ばれ、デサ・パンでは図5のN-3行W-1列にある²¹。

聞き取りによれば、村落を南北に貫通する幹線道路を挟んで、グリア・アグンの東隣の空地(N-3行C列)は、王宮がギアニヤールに移転した跡地だという²²。ブラーフマナ、サトリアの階級のうちでも、その代表格であるブダングダとラジャが、村落の北端に屋敷地を構えていたのである。

以上より、デサ・パンでは、山と海の軸である南北方向に沿って、身分が高いほど山に近い北側に住むというかたちでカーストが住み分けられていることが分かる。つまり、地形、象徴的方位、カーストの分布が、それぞれ対応しながら直線状にヒエラルキーを形成しているのである。

3-3 ギアニヤールにおけるカーストの住み分け

図5(中程以下)にギアニヤールにおけるカーストの住み分けを屋敷地ごとに示した。デサ・パンと同様に、東西方向最大3区画、南北方向最大9区画に分割して各カーストの占める割合を示した。

ブラーフマナは、N-1行W-1列、ブリ・アグンの西隣に最も集中している。二つの家系から成るこのブラーフマナの屋敷地のコンプレックスは、グリア・カワン kawuhan と呼ばれる²³。ブンパタン・アグンを形成する道路を挟んで、東側にブリ・アグン、西側にグリア・カワンが配置されるかたちは、デサ・パンと同様である。また、他のブラーフマナの屋敷地は単にグリアと呼ばれる。これらは、一部の例外はあるが、基本的にブンパタン・アグンの北側、つまりギアニヤールの北半分に分布している。

サトリアは、N-2行C列、N-3行C列、N-1行E-1列といったブリ・アグンに近い場所で高い割合を示している。ギアニヤール全体を見た場合には、やはり、ブラーフマナの場合と同様にブンパタン・アグンの南側街区(S-1行)より北に集中している。

ウエシアもサトリアとともに、S-1行より北に分布している。しかし、ブリ・アグンがあるC列でサトリアの割合が高いのに対し、その両脇のE-1列、W-1列でウエシアの割合が高い。中心より北側に分布しつつも、ウエシアはサトリアより低い身分階層として、その外側に居住している様子が伺える。

バリ・ピアサは、バリ島全体の人口の約9割を占めるこ

表2 バリ島における慣習法上の土地所有制度 (Stuart-Fox(2002)による)

慣習法上の土地所有の種類	所有者	用途	売買	義務	税金
①タナ・カスギハン	私有	農地・宅地	可	基本的になし	-
②カラシ・デサ	村落	農地	不可	寺院の儀礼執行	-
③タナ・アヤハン	私有	農地	可	寺院・村落の儀礼執行	-
④タナ・デサ	村落	主に農地	不可	なし	-
⑤タナ・ラバ・ブラ	寺院	農地	されない	寺院への買納	なし
⑥タナ・ドゥルエ・ブラ	寺院	農地	されない	寺院への買納	あり

ともあり、市域全体に分布しているが、その分布特徴には以下の二点が指摘できる。一点目は、ひとつの街区 (S-1行 E-1列) を除いて、ブンパタン・アグンの南側では全ての街区で7割を超えていることである。さらにその半分の街区で9割を超えていることから、市域南半分は、基本的にバリ・ピアサの居住区と考えてよい。二点目は、ブンパタン・アグンの北側に分布するバリ・ピアサの割合は、市域の北端街区 (N-4, N-5行) や東西の端の街区 (E-1行, W-1行) というように、周辺ほど割合が高くなる傾向があることである。

パндеもデサ・パンの場合と同様に少数だが市域北側に分布する。

以上から、ギアニャールにおけるカースト分布は、基本的に市域北半分にトリワンサ、南半分にバリ・ピアサというデサ・パンの場合と同じ山⇄海の軸線に沿った分布特徴を示す一方で、特に市域中心のブンパタン・アグンに面してグリア・カワンとプリ・アグンがあること、市域北半分においても周辺部ほどバリ・ピアサの割合が高まることを考えれば、中心により高い身分階層が、周辺ほど低い身分階層が居住する傾向がある。つまり、山⇄海の直線状の分布と中心⇄周辺の放射状の分布が重なりあっていると考えられる。

4. 街区構成と宅地割り

4-1 バリ島における慣習的土地所有制度

街区構成と宅地割りについて述べる前に、それらと深く関係するバリ島の土地所有制度について、既往文献をもとに触れたい。

Stuart-Fox(2002)によれば、バリ島の寺院の総本山であるブサキ寺院のある西カラングセム地方では、表2に示したように①タナ・カスギハン Tanah kasugihan、②カラシ・デサ Karang desa、③タナ・アヤハン Tanah ayahan、④タナ・デサ Tanah desa、⑤タナ・ラバ・ブラ Tanah laba pura、⑥タナ・ドゥルエ・ブラ Tanah druwe pura、といった慣習法 (アダット adat) に基づく6種類の土地所有制度があるという。表2の所有者、用途、売買、義務の各項目は慣習法上の規定であり、税金だけが公的な法律による項目である。⑤と⑥は、慣習法上の規定は同じであるが、政府に税金を払うか否かという点のみ異なる²⁴。

以下で触れるギアニャールの事例に関連して触れておきたいのは用途が宅地の場合である。私有であれば①、村落の共有であれば②である。①は売買が可能で、土地所有による義務もないのに対して、②は売買ができず寺院の儀礼執行の義務がある。ギアニャールの宅地の土地所有は、②のカラン・デサである。上述の場合と同様に、土地は売買することはできないという。また、カラン・デサの区画数は基本的に固定されており、部分的に区分けして売ることもできない。ギアニャールのビルトアップエリアを示した最も古い資料は、オランダ植民地政府が1924~25年に作成した縮尺5万分の1の地図²⁵であるが、その広がり70年以上を経てほぼ同じである²⁶。ギアニャールの宅地割りは、少なくとも近代において大きな変化を受けおらず、ある程度、古いものであることは確かである。

また、土地が売買できないことは、その屋敷地に住む人々も固定されてきたことを示す。上述のカースト分布もギアニャール成立当初から大きく変わっていない可能性が高い²⁷。

4-2 デサ・パンの街区における宅地割り

図6 (上側) にデサ・パンにおける宅地割りを街区ごとに分類して示した。ここでいう街区とは、四方を道で区切られた屋敷地の集合を示す。宅地割りパターンには、i)南北軸背割り型、ii)不規則型、iii)東西軸背割り型、iv)南北軸一列型、v)東西軸一列型の5つが見られる²⁸。

圧倒的に多いのは、i)南北軸背割り型である²⁹。ii)不規則型をとるのは、後にギアニャールへ移ることになる最初のプリ・アグンであった街区のみである。このプリ・アグン跡は、他の街区と比較して東西方向の距離が長いこと街区のスケールが大きいからである。王宮故の例外的な街区と考えられる。iii)東西軸背割り型、iv)南北軸一列型、v)東西軸一列型は、村落の境界に見られるだけである。

4-3 ギアニャールの街区における宅地割り

ギアニャールでは、プリ・アグンやその南側のアルン・アルンの街区に沿って主要な街路が通り、周辺の街区が形成されている。デサ・パンにおける街区と比較すると、東西方向に長いのが特徴である。このように村落であるデサ・パンには見られない、中心施設のある街区の大きさに沿った、いわば、「都市型街区」と呼べるような方形に近い街区が出現している。

宅地割りパターンは、デサ・パンで見られた5類型と基本的には同じである。しかし、デサ・パンではi)南北軸背割り型が支配的であったのに対し、ギアニャールでは、様々な宅地割りがモザイク状に混在している (図6中程以下)。図7にギアニャールで見られる宅地割りパターンを図式化して示した。

以下では、異なる宅地割りパターンを持つ街区の事例を取り上げ、その都市組織の構成を検討する。尚、iv)南北一列型については、デサ・パンと同様に集落の東西の端部に見られ、特に都市型街区の影響を受けていないため事例検討を行わない。

4-3-1 不規則型: スンゴアン・カンギン Sengguan Kangin 地区³⁰ (図8)

プリ・アグンやアルン・アルンに隣接する街区では、不規則型が多く見られる。スンゴアン・カンギン地区は、プリ・アグンの北側に隣接する街区である。街区内部に表通りからは直接入ることのできない宅地が多く存在する。このため街区内部には多くの路地が存在する。街区東側、南側、西側から内部へ入る路地は、数が少なく比較的短いものが多い。一方で、目立つのは北側から街区内部に入る路地である。また、図8には、屋敷地に入る門の位置を示したが (▲印)、街区北側の街路に面する屋敷地は、街路に向かって直接的に門を設けることはせず、一度路地に入ってから屋敷地に入る。この点も、その他の方角の街路に面する屋敷地が、街路に面して直接に門を持つのと大きく異なる。

聞き取りによれば、屋敷地の北口に門があると、居住者は屋敷地から外に出るときに聖山であるグヌン・アグンの方向を踏みつけることになり、非常に縁起が悪いという。ナワサンガの理想型では、バリ島の南部では本来、門は屋敷地西側の南端部、つまり最も世俗的な位置に設けられる。実際、北側に門を持つ屋敷地で重病人が出るなどした後、門を西側に付け替えた例もあるという。Saraswati

↑ カジャ
(山の方角)

- i) 南北軸背割り型
- ii) 不規則型
- iii) 東西軸背割り型
- iv) 南北軸一列型
- v) 東西軸一列型

デサ・バン

ギアニヤール

東西軸背割り型:
サンビアン地区
(図10)

不規則型:
スongoアン・カンギン地区
(図8)

プリ・アグン

ブンバタン・
アグン

アルン・アルン

南北軸背割り型:
サンギン地区
(図9)

プリ・
アビアンバセ

アビアンバセ

東西軸一列型:
クロック・カウー地区
(図11)

↓ クロツ
(海の方角)

図6 デサ・バン、ギアニヤール、アビアンバセにおける街区構成と宅地割りのパターン

屋敷地内の西住様の裏側を通り、擬似的に西側から中庭にアプローチするための道路

図10 東西軸背割り型:サンビアン地区の街区構成と宅地割り

北側以外から、屋敷地に入れるように、北側街路から内部へ延びる路地

図8 不規則型:スongoアン・カンギン地区の街区構成と宅地割り

図11 東西軸一列型:
クロック・カウー地区の街区構成と宅地割り

図9 南北軸背割り型:
サンギン地区の街区構成と宅地割り

図7 ギアニャールに見られる街区構成と宅地割りの5類型

(2002)は、バリの屋敷地の門は、正確には入口というより、屋敷地からの出口の性格を持ち、人体に例えれば、北東角区画の屋敷神(サング Sanggah)が頭とするなら、出口である門は、いわば「排泄口」にあたるという³⁾。以上の理由で、バリ島の屋敷地では、聖山に向かって門を設けることは忌避されているのである。

スongoan・カンギン地区で、北側街路に面して門を設けず、北側街路から街区内部に向かう多くの路地を持つのはそのためである。

また、北門を回避する理由として、カースト分布との対応を指摘しておきたい。市域北側に上位カーストが住むため、その向きに出る門を設けないという可能性がある。随唐長安城で、宮城・皇城の南側の街区が十字街でなく横街のみを持つ(左右民廛)のと同様に、身分の差による社会関係が投影されているとも解釈できる。

4-3-2 南北軸背割り型：サンギン Sanggin 地区 (図9)

南北背割り型の宅地割りパターンは、デサ・バンに見られる基本型である。これは、上述の北側の門の忌避を考えた場合、東西のどちらかに必ず門を設けることが可能な宅地割りパターンとして、理にかなったものであることが分かる。

ギアニャールでも同様な宅地割りパターンが散見されるが、都市型街区を考慮した場合に特徴的なのは、南北軸背割り型が、街区を南北軸に沿って短冊型に二分した片方として成立している場合である。アルン・アルンから2ブロック下のサンギン地区がその事例である。サンギン地区の東西幅は、屋敷地のスケールに対して、依然として単純な南北背割り型街区より長い奥行きを持つため、街区内部への路地がいくつか見られる。しかし、当該都市型街区全体が、真ん中の路地によって短冊型に二分されているのは、南北背割り型に準ずる宅地割りパターンを実現するためと考えてよい。

4-3-3 東西軸背割り型：サンピアン Sampiang 地区 (図10)

東西軸背割り型は、ギアニャールのやや周辺部に見られる。サンピアン地区は、スongoan・カンギン地区からさらに2ブロック上に位置する。同様に背割り型でも、東西軸背割り型の場合は、北側列の屋敷地は街区北側に向かって門を設けるより手だてがないように思われる。確かにサンピアン地区の北側の屋敷地列では街区北側の街路に面して門を設けている。

しかし、門から屋敷地内に入ると図10内の矢印で示したように、バレ・ダウ bale dawuh (より格式の高いものはロジ logi) と呼ばれる西住棟の背面が通路となっており、その後東に折れ曲がって中庭に入る動線になっている。折れ曲がりの突き当たりには、プリングー pelinggih と呼ばれる祠が立つ場合が多い。これは、通常門のすぐ内側に立ち屋敷地入口を守護するものである。つまり、街区北側の屋敷地では、屋敷地内の西端に沿って、さらに通路を設けること

によって、プリングーの立つ地点から擬似的に西側より屋敷地に入るように見せかけているのである。

4-3-4 東西軸一列型：クロツ・カウ Kelod Kawuh 地区 (図11)

東西軸一列型は、市域の周辺部に見られる。クロツ・カウ地区は、アビアンバセの南西端にある。東西方向に連続した屋敷地列が複数ならんだ構成をとるが、各屋敷地列の間には全て路地が通っている。これは全ての屋敷地に南から入れるようにするためである。

5. まとめ

本稿では、バリ島のギアニャールとその出自の村落デサ・バンを比較しながら、バリ島におけるヒンドゥー都市の構成について考察を行った。以下にまとめる知見は、あくまで本稿で扱った事例であるデサ・バンとギアニャールの相違に関するものであるが、今後、ヒンドゥー文化の影響を受けたバリ島の村落と都市を比較する重要な視点と考える。

①王宮であるプリの位置は、王族内の位の上下に関わらず、ブンパタンと呼ばれる四辻の北東角にある。この方位は、ナワサンガに基づく最も神聖な方位と一致する。これは、デサ・バンとギアニャールに共通している。

②カーストの住み分けは、デサ・バンでは、山⇄海の方角である南北軸に沿って、北側に上位カースト、南側に下位カーストといったように、象徴的体系、地形の高低、カーストが対応しながら直線状に住み分けがなされている。ギアニャールでも同じ傾向が見られるが、一方で市域中央のブンパタン・アグンやプリ・アグンを中心に上位カーストが集中し、周辺に行くほど下位カーストの割合が高くなるという同心円状の住み分けが見られる。ギアニャールにおいては、中心⇄周辺の空間ヒエラルキーが生まれている。

③デサ・バンの街区構成は、基本的に南北軸背割り型の宅地構成からなる。バリ島において忌避される屋敷地北側に門を設けることを回避する上で、理にかなった街区構成と宅地割りパターンをとっていると考えられる。

④ギアニャールでは、デサ・バンと比べて方形に近い都市型街区が成立している。このため南北軸背割り型を中心としたデサ・バンと同じ宅地割りを持つことができず、南北軸背割り型、不規則型、東西軸背割り型、南北軸一列型、東西軸一列型の5種類の宅地割りが混在している。特に不規則型は市域中心部に、南北軸一列型と東西軸一列型は市域周辺部に見られる傾向がある。

南北軸背割り型は、各屋敷地が北側に門を持たなくてもよい宅地割りである。不規則型の場合、街区北側に面する屋敷地でも、屋敷地内には路地を通して東側または西側から入る。東西軸背割り

型の場合、街区北側に面する屋敷地は、屋敷地内に通路を設け擬似的に西側から屋敷地に入るように見せかけている。南北軸一列型は基本的に南北軸背割り型の半分として東西どちらか側に門を持つ。東西軸一列型は街区の南側に必ず道と門を持つ。以上の宅地割りの類型は全て、ナワサンガに基づいて聖山の方向である屋敷地北側に門を持つことを忌避することによって成立したことが説明できる。

⑤ 18世紀にロンボク島に建設されたチャクラヌガラ(図1)は、純粋な南北軸背割り型の街区の集合からなる。これは植民都市として新たに計画されたチャクラヌガラが、北側に門を持つ屋敷地をつくらないための理想的な都市形態を基底として建設されたためであると考えられる。

参考文献

- [1] 布野修司, 脇田祥尚, 青井哲人, 牧紀男: チャクラヌガラ(インドネシア・ロンボク島)の街区構成-チャクラヌガラの空間構成に関する研究 その1, 日本建築学会計画系論文集, 第491号, pp. 135-140, 1997. 1
- [2] 布野修司, 脇田祥尚, 牧紀男, 青井哲人, 山本直彦: チャクラヌガラ(インドネシア・ロンボク島)の祭祀組織と住民組織-チャクラヌガラの空間構成に関する研究その2, 日本建築学会計画系論文集, 第503号, pp. 151-156, 1998. 1
- [3] 布野修司, 脇田祥尚, 牧紀男, 青井哲人, 山本直彦: チャクラヌガラ(インドネシア・ロンボク島)における様式分けの特性-チャクラヌガラの空間構成に関する研究その3, 日本建築学会計画系論文集, 第510号, pp. 185-190, 1998. 8
- [4] 石井米雄監修, 『インドネシアの事典』, 同朋舎出版, 1991
- [5] ミゲル・コバルピナス(関本紀美子訳), 『バリ島』, 平凡社, 1936
- [6] クリフォード・ギアツ(小泉潤二訳), 『ヌガラ 19世紀バリの劇場国家』, みすず書房, 1980
- [7] Stuart-Fox, D., "Pura Besakih", KITLV pr., Leiden, 2002
- [8] Tan, R. Y. D., "Description and Comparative Analysis of the Domestic Architecture of South Bali", M.A. thesis, Yale Univ., 1966
- [9] Budihardjo, E., "Architectural Conservation in Bali", Gadjah mada University Press, 1986
- [10] Oka Saraswati, A. A. Ayu, "Pamesuan", Universitas Udayana, 2002
- [11] Gelebet, I. N., "Arsitektur Tradisional Bali", 1978
- [12] Parimin, A. P., "Fundamental Study on Spatial Formation of Island Village: Environmental Hierarchy of Sacred-profane concept in Bali", 大阪大学学位論文, 1986
- [13] 大谷聡, 「軸の集住による生活空間の研究-インドネシア、バリ島を中心として-」, 佐賀大学学位論文, 2000年
- [14] 佐藤浩司, 「穀倉に住む ロンボク島、バリ島の住空間」, 『季刊民族学62』国立民族学博物館, 1992秋号, pp. 86-99
- [15] Nas, P. J. M., "The image of Denpasar: About urban symbolism between tradition and tourism" in "Issues in Urban Development", CNWS, Leiden, 1995
- [16] Samadhi, T. N., "Cultural Based Town Form Determinants and the Development of Balinese Urban Design Concepts", The 1st World Planning Schools Congress, 2001
- [17] Stuart-Fox, D., "Bibliography of Bali: publications from 1920-1990", KITLV Pr., Leiden, 1992
- [18] 鳴海邦領他, 『神々と生きる村 王宮の都市-バリとジャワの集住の構造-』, 学芸出版社, 1993
- [19] Mahaudiana, "Babad Manggis Gianjar", A.A.Gde Thaman, 1968
- [20] 吉田慎吾, 『バリ島民』, 弘文堂, 1992

脚註

- 1 参考文献[1]~[3]
- 2 本稿では、バリ島の王国は藩王国とし、ジャワ島のヒンドゥーまたはイスラーム王国は単に王国と記述する。藩王国とはイギリス統治下のインドの土着王国を指し示す用語であるが、バリの場合も同様に群雄割拠の状態が見られる。一方でジャワの王国はジャワ全体を単一で支配しており状況が異なる。
- 3 ジャワの最後にして最大の古代王国。1293年にシンガサリ朝のウィジャヤにより建国される。その衰退時期は15世紀初頭から15世紀後半など諸説ある。(参考文献[4], pp. 403-405)
- 4 1365年成立。同王国の宮廷詩人プラパンチャが綴ったもの。1894年のオランダのロンボク島遠征の際にチャクラヌガラから発見され、13~14世紀のジャワ社会を理解するための基本資料とされる(参考文献[4], pp. 302-303)。
- 5 参考文献[5], p. 78
- 6 執筆に加え、以下が調査者として参加。宇都宮崇行、鈴木星穂、高橋俊也(以上、京大)下川晃生、辻宗彦、長谷川豪(以上、立命館)。
- 7 バンジャールは、慣習的に成立した伝統的な地縁コミュニティであるバンジャール・アダットbanjar adatと近代化の中で行政区画によって練引き

- された単位としてのバンジャール・ディナスdinasが存在する。
- 8 表1に挙げた聞き取り調査は、筆頭著者が直接にインフォーマントにインドネシア語で行った。カースト、コミュニティ単位の聞き取りは、筆頭著者が簡単なインドネシア語による調査指示を行い全調査メンバーで行った。
 - 9 参考文献[5]~[18]
 - 10 「デサdesa」は、インドネシア語、バリ語で、「村」を示す。
 - 11 参考文献[19], pp. 7-29
 - 12 一般にバリ島の伝統的住居は、バリ・アガと呼ばれるヒンドゥー文化到来以前の古バリ人の村落住居と、バリ・マジヤパヒトと呼ばれるヒンドゥー化後の住居に大別される。ここで村落と都市で共通していると述べるのは、バリ・マジヤパヒトを指している。
 - 13 本稿では、「集落」=settlementの訳語として使用している。つまり、集落は、村落、都市の両者を包含する概念として用いている。
 - 14 大臣、県知事、村長は、そのヒエラルキーを表すための便宜的な日本語訳である。現在の行政区分としては、パン、スロンゴ、ビトラは、村落部を示すデサであるが、ギアニャールとアビアンバセは、都市部の行政単位としてインドネシアで一般的に使われるクルラハンkelurahanに分類されている。
 - 15 参考文献[18] p. 70-72
 - 16 インドネシア語のperempatan(四辻)にあたる。
 - 17 プリ・アビアンバセは、山側(北)のプリ・カレランkaleran(北プリの意味、カレランは、バリ語で「山へ」を示すカジャの雅語)と海側(南)のプリ・クロダンkelodanから成る。当然、山側の方が格式が高い。
 - 18 「ジュロ」とは、王族の子孫の系譜から分派として外れ、プリの外に居を構えた貴族の末裔の屋敷地を指す。スongoanは、ギアニャールのバンジャールのひとつの名前である。ジュロは、「内」の意味であり、傍流であるが元来は、王族の内に含まれることを示していると考えられる。
 - 19 ジャバはバリ語で「外」の意味である。つまり外部の人の意味である。
 - 20 カーストの割合を示すグラフは、プリの位置する四辻より、北側をN、南側をSとし南北方向(行)を記述する。若い番号ほどプリに近い。またプリの位置する縦列(列)をC(Center)とし、東側をE、西側をWとする。
 - 21 こうした格式の高い屋敷地内では、住棟も格式の高いものが見られる。通常、ブラフマやサトリアの屋敷地内の北側に建つ母屋はグドンgedongと呼ばれ、バリ・ピアサの屋敷地の母屋がムテンmetenと呼ばれるのと異なる。グリア・アグンなどでは、さらに格式の高いグドンが見られ、グドン・グヌン・ラゲdong gunung rataと呼ばれる。グドンのテラスが二段になっているものがこう呼ばれる。グヌンは山、ラタは平地の意味で、前者は屋根、後者はテラスを示している。デサ・パンのグリア・アグンの家長でギアニャールの最高司祭プダングであるIda Pendeta Gde Agung Putra氏によれば、段階状のテラスから徐々に上がって最終的に屋根にいたる住居のかたちが、グヌン・アグンを中心としたバリ島全体をシンボライズしたものだという。
 - 22 吉田(1992) p. 53によれば、一般に現在でも王(その子孫)の住む屋敷地である宮廷プリは西に面し、ブラフマナの住む屋敷グリアは東に面しているという。東西の方角に関しては、象徴的に東(日の出)が西(日の入り)に優れている。法的権威は宗教的権威に従い、王は特にプダングに敬意を払うため、このような配置関係になっているのである。
 - 23 カワンは、カウー(「西」の意味)の派生語であり、グリア・カワンは、「西のグリア」の意味である。
 - 24 表2は、参考文献[7] pp. 40-46による。一印は同文献に記述が無い項目。
 - 25 オランダ植民地政府地理局(Topografischen Dienst)が1920年代に実測・作成発行したもの。バリ島全体を22葉によってカバーしている。そのうち当該葉の番号は、Blad 105D. (Alg. No. XLIV-62D)。尚、本稿では、日本軍がリプリントしたものを参照した。
 - 26 アルン・アルン内に存在した屋敷地は、第二次大戦後、図5でギアニャールのS-2, S-3行E-1列に移動させられたという。
 - 27 カラン・デサの場合、血縁が絶えて相続者がいなくなれば、理論的には居住権は村落内で譲渡される。しかし、Stuart-Fox(2002)も指摘するように、バリ社会においては前近代から引き続き大家族で居住してきたので、家系が断絶し居住者が入れ替わる現象は希なはずである(参考文献[7], p. 43)。
 - 28 背割りの宅地を持つ街区の中には、路地から引き込まれる街区内部の宅地が存在し、部分的に3列になる街区があるが、これらも街区の構成は背割り基本となっており、特に区別を行っていない。この点については次節のギアニャールの場合も同様である。
 - 29 本稿では結論部分で、この理由が、北門回避に起因することを指摘しているが、その議論は、4-2のデサ・パンに関する部分でなく、後述する4-3-2のギアニャールの南北軸背割り型について触れる中で行っている。現地調査は、最初にデサ・パン、次にギアニャールの順に行った。しかし、規則正しいデサ・パンの宅地割りからは、その理由が分からず、様々な宅地割りが混在するギアニャールで、何か特異点が無いかを検討した結果、北側に門を設けられる余地があるのに北門が無い事実から、北門回避とその理由が明らかになったからである。そこから逆にデサ・パンの宅地割りがひとつの理想型を実現しているという見方に達した。本稿で、デサ・パンの宅地割りについて敢えて、事実と理由を異なる節で説明しているのは、以上の現地調査と思考のプロセスに沿ったためである。
 - 30 これらの地区名は、その街区が属するバンジャールの名前である。
 - 31 参考文献[10], pp. 46-73

(2004年10月8日原稿受理, 2005年3月14日採用決定)